

創建

そうこん

巻頭言：森田健一・1~3

ネットワークOB&OG_24：池原智宏・4

第26回 JIA 東北建築学生賞応募作品・5

大学院特別講義：小原烈・6

研究発表・7

教室ニュース・8

2022・11・20 VOL. 57 NO. 2 (通巻 181 号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

皆さんは、多摩美術大学八王子図書館（伊東豊雄建築設計事務所設計[2017]、以下、図書館）をご存じでしょうか？私は施工者として携わりました。

施工者の施工管理という仕事を説明すると、一般的には、建築工事のQ(品質)C(コスト)D(工程)S(安全)E(環境)をマネジメントする仕事である、とよく言われます。QCDSEそれぞれについて、顧客の求める品質の建物を、契約した工期と金額内に無事故で納めるために、工事現場を管理する仕事です。実際には、管理だけでなく、いかに工事をスムーズに進めるか、そのための段取りや計画を組み立てる部分が大きく、面白いところでもあります。また、設計段階では決まっていない設計の詳細を、実際に施工できるレベルまで詰め、施工図、製作図にする作業も、施主・設計者と共に作り上げる感覚で楽しい仕事です。

いわゆる現場監督という3K(キツイ、汚い、危険)を思い浮かべる方も多いかと思いますが、皆さんが入社する頃には、新3K(給与、休暇、希望)が当たり前になっているように、業界をあげて取り組んでいるところです。

さて、図書館に話を戻しましょう。伊東先生が多摩美大の客員教授をされている関係で創立70周年の記念事業として、この建物の設計を多摩美大から依頼されました。世界的にご活躍されている伊東先生ご自身が、実際に現場に来られたことは、数えるほどしかありませんでしたが、若手所員が2名常駐され、伊東先生の意を汲んで設計を詰めていく作業と工事監理をされていました。

この図書館(写真2-3頁)は普通の建物とは形も構造も違う、唯一無二のものです。大小様々なアーチのコンクリート打ち放し躯体にガラスが同面で納まり、床には勾配があり、柱の足元は細く、通り芯はRを描き、一つとして同じ形状の柱がなく、ひび割れ誘発

目地もない特殊な建物でした。構造的には免震+SC(鉄骨コンクリート)造で、力学的には鉄骨で成り立っており、それをコンクリートで覆って意匠性と耐火性を持たせています。

初めて図面を見た際、直線の通り芯が3本しかなくそれ以外すべて曲線で、床レベルは勾配と段差があるのに加えてアーチ構造で、頭の中で立体をイメージするのが困難でした。幸い模型があったので、何度もその模型を見て完成形をイメージしました。

そんな状態で始まった工事ですが、この特殊な建物をどう成り立たせるか、社内外の各種専門家と相談し、まとめていきました。まず、型枠が3次元の曲面を有するため、BIMが普及していなかった当時の技術では、どう

未知なる空間との対峙 ～多摩美図書館を施工して～

非常勤講師 森田 健一

[担当科目：建築施工Ⅱ]

作るか途方にくれましたが、鉄骨業者が3DCADを使えたので、そのデータを転用して型枠図を起こしました。型枠加工は全て工場でのNC(数値制御)により加工し、現場組み立てすることで精度の高い型枠を作りました。

また、ひび割れ誘発目地のない躯体に有害なひび割れを発生させず、中に鉄骨の入った200~220mmの厚みの型枠内にいかに密実にコンクリートを充填するか問題でしたが、コンクリートは膨張材を使った流動化コンクリートとし、モックアップで施工性を検証したり、ひび割れ解析をしたりして事前検討をしっかりと行い、実際の打設に臨みました。

外装ガラスは一般的なフロートガラスでしたが、建物の2面は半径90mの円弧を描く緩やかな曲面であり、ガラスは工場にて

コンピュータ制御でカットし、曲げ加工を施したものを現場に搬入し、設置しました。通常、ガラスは、サッシュ(窓枠)のガラス溝に嵌め込み、そこに施工誤差や、地震等による層間変位を吸収するクリアランスを設けますが、この建物のアーチ構造は、免震装置の働きと相まって、その変形をほぼ無視できるとの考えから、設計図面ではガラスを直接コンクリートのアーチに嵌め込み、枠を見せない躯体とガラスが線一本で接したような納まりでした。実際の施工は、躯体の欠き込みの中にサッシュを埋め込み、サッシュに仕込んだガラスピースにストラクチャーシーラントで外装ガラスを接着固定しました。これにより、ガラスの外表面と躯体の外表面がぴたりと揃った外装が出来上がったのです。

竣工時に、美大の先生から「柱型が彫塑のようだ」と言われたことが、強く印象に残っています。鋭利な彫刻刀で彫り込んだような柱を見ての感想ですが、美大の先生にそう言わせるのが、この建物のすごいところだと改めて感じました。また、現場に常駐して苦楽を共にした若手設計担当者に、「僕はもうこれ以上の建築物に携われる気がしない」とまで言わせるほど、思い描いていた通りの高い完成度のものが施工できたことに、施工者として喜びを覚えたものです。

このように、関係者が思い入れを持って情熱を注ぎこみ、一所懸命に力を合わせることで、難しい建物を精度よく作り上げることができました。施工管理の仕事は、苦勞も多い分、実にやりがいある仕事だといえます。3Kイメージから現場を避ける人もいますが、図面や模型だけでは建物は建ちません。建築家の夢をカタチ(実物)にするのは、施工管理者の仕事です。少しでも現場、施工管理業務に興味を持ってくれる人が増えてくれれば幸いです。



執筆者略歴：

1961年茨城県生まれ。1986年日本大学大学院工学研究科(建築学専攻)修了。

同年鹿島建設株式会社入社。首都圏及び海外での建築施工現場における施工管理業務を約27年。

東京支店建築工事管理部にて技術コンサル他約4年。

伊東豊雄建築設計事務所設計/多摩美術大学八王子キャンパス図書館棟(2007)の施工を担当。

2017年より東京建築支店建築工事管理部にて、社員教育、協力会社育成業務等担当しながら現在に至る。

一級建築士。一級建築施工管理技士。



- 1: 図書館棟の全景
- 2: 新刊雑誌・映像閲覧エリアを見る
- 3: 外壁と同面に納めた外装ガラス
- 4: コンクリート打ち放して仕上げたアーチ型の柱

ネットワークOB＆OG_24

好きな事と環境が人を成長させる

北海道おといねっぶ美術工芸高等学校長 池原 智宏

このたび永田進先生(建築22回)からお話があり、「創建」に寄稿させていただくことになりました。

私は昭和61年4月に工学部建築学科に入学しました。出身は北海道旭川市で、北海道旭川工業高等学校建築科3年のとき、担任であった故・高崎 格(建築14回)先生の勧めもあり、入学の機会を得ました。高校入学時から教員を考えていたことも、日本大学工学部を選んだ理由になりました。

初年度は俊英学寮に入寮しました。6畳ひと間、2人部屋ではありましたが、集団生活での楽しい思い出が沢山ありました。その当時、全国各地から優秀な学生が数多く入寮しており、現在もお付き合いが続いています。俊英学寮での生活が、これまでの私の教員人生に大きな影響を与えてくれています。今、言われているコミュニケーション能力や、基本的な生活習慣、自立心がそこで育まれたと思います。俊英学寮は、今振り返ると優秀な人材を育てていたと思います。2年からは学校近くの共同風呂・共同トイレのアパートで生活をしました。授業は大変でありましたが、学ぶことの楽しさも実感でき、将来教員を目指していた私にとってすべての学びが充実したものでした。講義で印象に残っていることは沢山ありますが、谷川正己先生の建築史で、特にフランク・ロイド・ライトのお話は、ライトの世界に引き込まれました。私も教員として教壇に立った時、学生たちにフランク・ロイド・ライトの話を意識して話したことを覚えています。また、建築材料や建築実験の講義では、特に実験レポートの指導で、大濱嘉彦先生と出村克宣先生の指導が厳しくも熱心で、生徒想いの先生方と今でも深く思い出に残っています。4年の卒業研究でお世話になったのが、外山隆吉先生でした。先生はソフトテニスをしていたスポーツマンで、卒論指導も熱意のある方でした。私が教員2校目に赴任した北海道苫小牧工業高等学校の御出身でしたので、同郷の先生と大変親しみのある恩師でした。大学卒業後は、平成2年4月より教員の道に入り、北海道で採用され3校で教諭を経験しました。特に3校目の札幌工業高等学校では、恩師である故・高崎 格(建築14回)先生が定時制の講師として来ておられ、昔の話や建築について話を交わすことも沢山ありました。また、その当時道都大学に赴任されていた永田(建築22回)先生ともお会いする機会も多く、大変お世話になりました。札幌工業高等学校では建築科長として優秀なスタッフ・学生に恵まれ建築科として成果をあげることができました。



私は、縁があって平成28年4月昇任し、名寄産業高等学校、室蘭工業高等学校、旭川工業高等学校で教頭を経験し、令和3年4月から北海道おといねっぶ美術工芸高等学校の校長として採用され2年目を勤務しております。この教員人生において、工学部を卒業された先輩の方々に大変お世話になりました。高校時代担任であった故・高崎 格(建築14回)先生、良き相談相手になってくださった故・行場 義修(建築30回)先生、現在北海道札幌工業高等学校の校長である太田 潤一(電気34回)先生など校友に恵まれました。

本稿のタイトルとした「好きな事と環境が人を成長させる」とは、好きな事を一生懸命できる環境が、人の能力を伸ばすのではないかと、現任校の生徒達を見て感じたことによるものです。「なぜ生徒が集まるのか」、「なぜ成長が見られるのか」が、赴任してからの疑問でした。自分なりに見えてきた結論が、好きな事がやれる事と、その環境が大事ではないかと言うことです。決して便利ではない音威子府村の環境で、生徒達はその能力を伸ばしています。「絵が好き」、「木工が好き」で生徒達は全国から集まって来ます。すごく単純な理由ですが、好きな事をやれるから生徒も集まるし、色々な面で成長も見られるのではないのでしょうか。

自分の大学生活を思い返すと、工学部にも「建築が好き」の環境がありました。充実した施設設備、興味を持って受けることができた講義の数々は、私の「建築が好き」を倍增してくれました。また、俊英学寮生活も、沢山の交友との出会いと、慣れない土地での大学生活を好きにしてくれました。6畳ひと間2人部屋の生活は、決して恵まれた環境ではなかったかもしれませんが、食事も寮行事もすべて共同生活の中で友達と上手にこなしていく、素晴らしい経験をさせてもらいました。音威子府村の生徒の生活と同じで、「上手く住みこなしていく」ことは、人生を歩んでいくために大切な力になっていると思います。どうか、「好き」を学べる工学部で有り続けてください。

高校での教育は大学とともに、未来の日本を支える人材を育てる場として非常に大切です。そこには、有能な教員が必要となります。今後、工学部出身の有能な教員が増えることに期待をするとともに、教員志望の学生の育成にぜひともお力添えいただけますようお願い申し上げます。工学部の卒業生として、母校のために微力ながらお役にたてれば幸いです。

終わりに、在校生、校友の御活躍と母校の御発展を祈念するとともに、お世話になった先生方に感謝申し上げます。

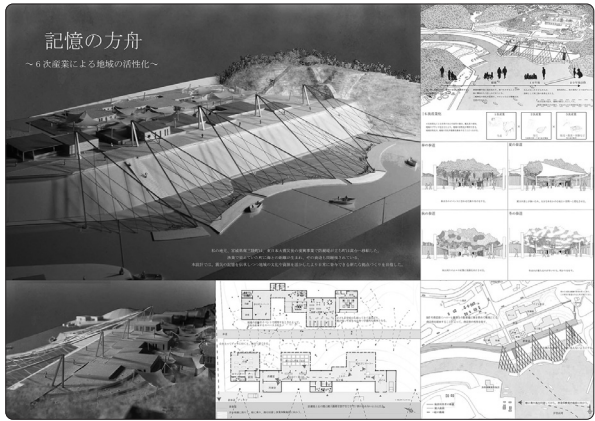
第26回 JIA 東北建築学生賞応募作品

JIA 東北建築学生賞は(一社)日本建築家協会東北支部が主催する、東北地方の大学、高専、専門学校の建築学科に在籍する学生を対象としています。決まった課題が与えられるのではなく、各学校での授業課題として制作された作品で応募をすることが特徴です。本校からは例年、学内で選抜された4年生2名、3年生1名が出品をします。本年度は下記の3名の学生が選ばれ応募をしました。

阿部 佳穂(4年)

記憶の方舟

～6次産業による地域の活性化～

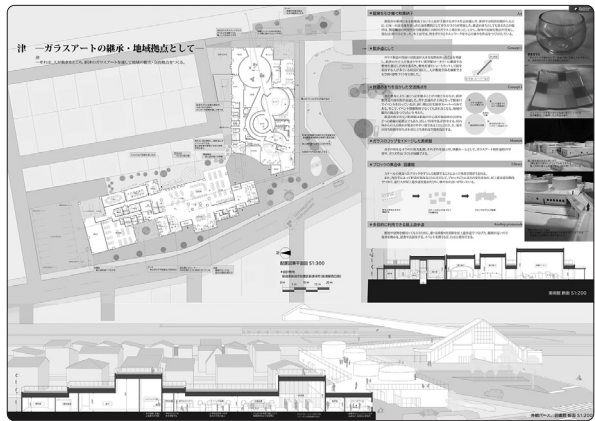


私の地元、宮城県南三陸町は、東日本大震災の影響で防潮堤が立ち、町は高台へ移転した。漁業で栄えた町に海との距離が生まれ、その衰退も問題視される。設計では、震災の記憶を伝承しつつ地域の文化や資源を活かした、より日常に寄与できる新たな拠点づくりを目指した。提案は具体的に3つ。1つ目は通りの再生。被災前に家があった場所に杉丸太をたて、歴史と非計画性を醸し出しながら、季節ごとに豊かな表情を見せる神社の参道を再生する。新参道は、神社の階段の踊り場を津波が来た高さとし、震災の記憶・教訓の伝承もする道とした。2つ目は産業の6次化による地域の持続と賑わいの創出。3つ目は町と海のつながり。大きなトラス構造は、ワカメの干し場や海の生物の生息地となり、視覚的にも海と人をつなげる新たなシンボルになる。

小柳 陽菜子(3年)

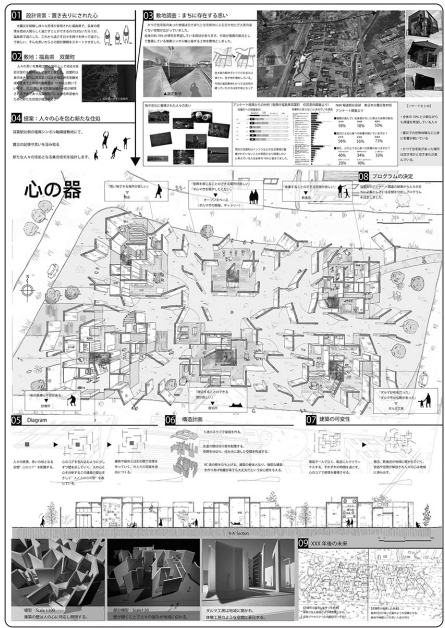
津

—ガラスアートの継承・地域拠点として—



私は、新潟県新潟市のガラスアート作品を展示する複合施設を同市内の駅の隣に計画した。この地域は石油と鉄道のまちとして知られ、戦後には日本一の産出量を誇った石油を燃料に16のガラス工場が軒を連ね、製品輸送には鉄道が用いられた。現在はガラス工場が1軒に衰退し、駅前商店街では閉業する店もある。そのため、地域内外にガラスアートを発信して伝統を継承し、地域の交流拠点となる施設を目標とした。

計画地をショートカットして駅を利用する人が多くいる状況に着目し、配置される建物を人が横断して駅へ移動ができることを意識した。駅と施設は屋上遊歩道でつなげ、電車を眺めて散歩する、飲食店が期間限定で店を出す、イベントを開く、など自由に使用できる。交流の輪の形成や商業の再生などの活力を生むことを目指した。



糠谷 勇輔(4年)

心の器

大学生活の3年間を福島県で過ごす中で、東日本大震災や福島第一原子力発電所事故の影響による長く進まぬ復興などにより、人々の心の中にある福島県が存在が暗く見えてしまっていると感じました。日本国内にとどまらず世界に原発事故のニュースは報道され、風評被害や放射線問題は依然として続いています。そして、震災で生じた恐怖、不安、悲しみなどの様々な感情が心に残ったまま生活を続けていることを知りました。福島県で今まで過ごしてきた日々と、これからの過ごす日々に誇りを持って欲しい。原発事故の発生した福島県双葉町を敷地と選定し、調査によって得られた蓄積された思いと、少数ながらも双葉町に帰還を希望している現状から、蓄積された思いを汲み取り人々の新たな住処となる住居群を設計しました。

大学院特別講義

「これからの美術館」（佐藤慎也先生）を聴講して

大学院博士前期課程1年次生 小原 烈

令和4年9月26日(月)、70号館7044教室にて、「これからの美術館」と題して、佐藤慎也先生(日本大学理工学部建築学科教授、八戸市美術館館長)による大学院特別講義が開催され、大学院生・学部生・先生方を含めた多くの方が聴講した。その内容は、磯崎新の提唱した美術館の世代論をさらに展開させたものであり、これまでの美術館の変遷と、これからの美術館に求められているニーズを説いた、非常に興味深いものであった。

1 ―― 三世代の美術館

はじめに、先生はこれまでの美術館について、建築家の磯崎新の論から、以下の3つの世代に分けて説明された。

[1] 第一世代

18世紀の末までに成立した、王侯貴族の私的コレクションを公開する目的で設立されたものであり、「ルーヴル美術館」をはじめとして、額縁や台座を持った具象的な美術作品が、有彩色の壁面に展示されている美術館。美術品は、その額縁で切り取られ、その中で完結しており、その範囲に意識を向ければ、その様相が確認できる。先生は、画家のユベール・ロベールが描いた、「グランド・ギャラリーの改造計画」の絵をスライドに映しながら、この世代の美術館で意識された計画について、美術品同士が近接していること、美術品がよく見えるように天井から光を入れていることが挙げられると述べられた。

[2] 第二世代

いわゆるホワイトキューブとよばれる均質な展示空間を持った美術館。美術品に抽象的な表現を用いたものが多くなり、近代主義的視点(ロシア構成主義など)によって、究極的に平面や立体に還元された。これは均質空間に浮遊する状態をイメージしており、そのイメージに合わせて、白い展示壁面が用いられた。美術品抽象化による、額縁の小型化や白い壁面によって、展示の在り方も変わり、絵が他の絵の鑑賞の妨げにならないように、距離を置いて展示された。先生は、その例として、ニューヨーク近代美術館(MoMA)やポンピドゥーセンターの展示室を挙げられていた。

[3] 第三世代

場所に合わせた作品という概念が生起し、その場所で、芸術家が作品をつくること(インスタレーション)を背景に成立した展示空間を持った美術館。第二世代のホワイトキューブから、徐々にそうした場所性に視座を置いた空間が増えていった。建築家によってその解答は様々で、先生は、青木淳さんと西沢立衛さんの作品を挙げ、その解答の違いについて述べられた。また、リノベーションについても言及され、ハンプルガー・バーン・ホフ現代美術館やテート・モダン

などの改修例を挙げて、駅舎や火力発電所などの、そこにあった空間の残滓を活用し、そこに合わせた空間をつくることは、場所性を活かすことの一つの解答ではないかと述べられていた。

2 ―― これからの美術館「第四世代の美術館」

美術館は展示されている美術作品が変化することによって、その後を追うように、変化してきていることが、第一世代～第三世代を見ていく中で分かった。使われ方の変化によって、建築の変化が決まるのである。つまり、近年の美術作品の変化をとらえることによって、これからの美術館を考えることができるのではないか。先生は、これからの美術館を、磯崎新に倣い、第四世代の美術館と名付けた。先生の言う第四世代の美術館とは、人が含まれた作品のための展示空間を持ち、人が関わることによって成立する美術館のことである。先生は、この第四世代の美術館について、自身が関わったプロジェクトを例に挙げ、説明した。そのいくつかの例の中で、私が特に印象に残ったものは、みんなの楽屋である。人が組み込まれた展示室に重要な要素の一つとして、居心地の良い空間を追求することを意識し、物を見る空間から、人を見る空間へとシフトさせていた。床がカーペットで仕上げられ、壁に小さい穴があき、フックがかけられるようになっているなど、普通の美術館(物を見ることを意識した展示空間)からすると考えられないような展示室を利用している点に、感銘を受けた。

3 ―― ジャイアントルーム

最後に先生は、自身が館長を務めている八戸市美術館(西澤徹夫＋浅子佳英＋森純平設計)の中心理念としてある「ジャイアントルーム」での活動を紹介した。このジャイアントルームでは、市民が集まり、そこにアーティストや美術館スタッフが集まることによって様々な新しいものを想像していると述べていた。このジャイアントルームが標榜するものは大変分かりやすく、まさに「人が関わることによって成立する美術館」だと感じた。

4 ―― 最後に

今回の講義で先生は、美術館の変遷と、これからの美術館に対する持論を展開し、現在行っている取り組みについて解説して下さった。私自身も美術館の研究をしているが、今回の講義で、自身の知見の浅さを思い知った。研究に対する姿勢を見直し、今後の大学院生活を有意義なものとするよう、精一杯努力していきたい。

研究発表

- 速水清孝「日本の建築家 その多様性と安藤忠雄」『建築ジャーナル』企業組合建築ジャーナル、No.1335、2022.10、pp.21-22.
- 日本建築学会建築法制本委員会編『建築法制の制度展開の検証と再構築への展望』技報堂出版、2022.10(速水清孝分担執筆).
- 山田義文「高齢者施設における「見守りシステム」の活用と運用に関する研究－職場環境と見守り対応への取り組みについての報告－『日本建築学会地域施設計画研究論文集』40、pp.47-56、2022年7月.
- 宮崎渉・浦部智義・鈴木康太・池田チムル「福島県内の幼保施設における木質化の影響－教職員を対象とした調査分析－」『日本建築学会地域施設計画研究論文集』40、pp.113-120、2022年7月.
- 高橋岳志「CLT 建築物の生産システムに関する研究－CLTの製造と移動の実態－」『日本建築学会地域施設計画研究』40、pp.195-200、2022年7月.
- 高橋岳志・濱尾博文「施設建築物における木造化の検討－救護施設/NHを事例として－」『日本建築学会地域施設計画研究』40、pp.201-206、2022年7月.
- 廣田篤彦・戸村優・佐藤晟矢・山際啓太・佐々木力太・鈴木隆央・黒坂騎羅弥「重点道の駅に関する研究」『日本建築学会地域施設計画研究論文集』40、pp.431-438、2022年7月.
- 荒木裕人・福井拓也・神田利之・齋藤俊克「再乳化形粉末樹脂を用いたポリマーセメントモルタルの電気抵抗率および強さ性状に及ぼす使用材料と調合因子の影響」『コンクリート工学年次論文集』Vol.44 No.1、pp.988-993、June 2022.

第85回東北支部研究報告会 | 会期:2022年6月18日(土)～19日(日) | 会場:オンライン

- 職員へのアンケート調査によるサービス付き高齢者向け住宅の実態把握と課題に関する研究 その1 職員の評価によるサ高住の建築特性の分析
 - 王健嬌・山田義文
- 過疎化が進む地域における高齢者の視点から見たバリアフリー環境に関する研究－福島県猪苗代町を対象として－
 - 栗崎聖崇・山田義文
- 栃木県立美術館の構想と設計の過程について
 - 鈴木ひなた・速水清孝
- ボルトの接触を考慮した孔周辺の応力度分布に対するレーザ孔加工ノッチの影響
 - 三沢健介・浅里和茂
- 斜交トラスを有する鉄骨置屋根構造体育館の弾塑性振動解析
 - 木村悠人・浅里和茂
- コンクリートのひび割れの自己治癒を目的としたバクテリアの環境条件による繁殖性
 - 川崎浩長・春木満・PAREEK Sanjay
- 吸水調整材で下地処理したポリマーセメントモルタル被覆コンクリートの中性化抵抗性
 - 田中拓弥・齋藤俊克・出村克宣
- 再乳化形粉末樹脂を用いたポリマーセメントモルタルの強さ性状に及ぼす使用材料及び調合因子の影響
 - 荒木裕人・齋藤俊克・出村克宣
- 種類の異なるセメント混和用ポリマーを用いたポーラスコンクリートの圧縮及び曲げ強度性状
 - 田中孝暉・齋藤俊克・出村克宣

2022年度日本建築学会大会(北海道) | 会期:2022年9月5日(月)～8日(木) | 会場:北海道科学大学およびオンライン

- コンクリートのひび割れの自己治癒を目的としたバクテリアの性質に関する一考察
 - 川崎浩長・春木満・Sanjay PAREEK
- ポリマーセメントモルタル被覆コンクリートの中性化抵抗性に及ぼす吸水調整材による下地処理の影響
 - 田中拓弥・齋藤俊克・出村克宣
- 使用材料及び調合因子が再乳化形粉末樹脂を用いたポリマーセメントモルタルの強さ性状に及ぼす影響
 - 荒木裕人・齋藤俊克・出村克宣
- 各種ポリマーセメントモルタルを結合材とするポーラスコンクリートの圧縮及び曲げ強度
 - 田中孝暉・齋藤俊克・出村克宣
- 文化財建造物を対象とした火災安全性の研究 T製糸場を対象とした延焼シミュレーション
 - 田中桃子・森山修治
- 重要伝統的建造物群保存地区を対象とした火災時の延焼状況と住民避難 福島県K市O地区を対象としたシミュレーション
 - 森山修治
- 現存天守を対象とした火災安全性の研究
 - 佐藤小百合・森山修治
- 職員へのアンケート調査によるサービス付き高齢者向け住宅の実態把握と課題に関する研究 その2 職員の評価によるサ高住の運営実態の分析
 - 王健嬌・山田義文
- 自治体に建設された施設の比較分析 東日本大震災後に福島県内に建設された復興交流施設に関する研究 その1
 - 樺山拓也・浦部智義・滑田崇志・高木義典・宮崎渉

- 福島県内における市民に開かれた庁舎建築に関する研究 東日本大震災後における新築庁舎の傾向
 - 吉澤伊代・市岡綾子
- 福島県内の市立美術館の「友の会」の実態に関する研究公立美術館における「友の会」に関する研究 その1
 - 小原烈・浦部智義・高木義典
- 福島県内5施設の保育施設職員を対象としたアンケート調査分析 保育施設の計画要件に関する研究 その1
 - 池田チムル・浦部智義
- ファブリケーション施設における空間レイアウトの調査研究東京都と東北6県を対象にして
 - 園田駿希・宮崎渉
- 東日本大震災後に福島県内に建設されたログハウス型仮設住宅の移設再利用に関する研究
 - 奥山翔太・浦部智義・滑田崇志・早川真介・渡部昌治・高木義典・田中重夫

- 「[とりのみょうもく]」の木割に見られる主柱と袖柱の規定
 - 山岸吉弘
- 放置艇問題及びポートパークの実態把握に関する研究
 - 鹿志村隼多・山本和清・宮崎渉
- 地震力を受ける変位型梁－柱要素の正則化手法の開発 その1 等価長さの評価と圧縮軟化のモデル化
 - 堀川真之・上村岬
- 地震力を受ける変位型梁－柱要素の正則化手法の開発 その2 ポストピークに及ぼす等価長さの影響
 - 上村岬・堀川真之
- 鉄骨置屋根構造体育館における斜交トラスの性能評価
 - 木村悠人・浅里和茂
- 木材表面に対するジオポリマー接着性能及び合成梁曲げ性能の実験研究 その1 試験体概要と荷重－変位関係の考察
 - 鈴木裕介・織田英樹・谷口与史也・Sanjay PAREEK

- 木材表面に対するジオポリマー接着性能及び合成梁曲げ性能の実験研究 その2 実験結果と付着強度の比較
 - 織田英樹・鈴木裕介・谷口与史也・Sanjay PAREEK

- 接触解析によるレーザ加工された高力ボルト孔周辺の応力度分布
 - 三沢健介・浅里和茂
- 2021年福島県沖地震により被災したRC造建物の復旧期間の定量化
 - 佐藤温起・堀川真之
- 準寒冷地におけるログハウス入れ子構造の蓄熱効果に関する研究 その1「部屋の家・針生の箱2」室内温熱環境の実測調査
 - 宮岡大・浦部智義・長内勇樹・滑田崇志・高木義典

- 福島県内におけるごみ焼却施設の余熱利用の実態に関する研究
 - 浦田陽太・浦部智義
- 第34回日本インテリア学会大会(福島) | 会期:2022年10月22日(土)～23日(日) | 会場:日本大学工学部およびオンライン
 - 市民に開かれたスペースの設えに関する研究－福島県内の庁舎におけるケーススタディー
 - 吉澤伊代・市岡綾子
 - 屋外空間に設置された本棚に関する実践的研究－矢吹町のまなかに交流を生む仕掛け
 - 横井誉大・市岡綾子

教室ニュース

- 野内英治准教授は、3月10日に矢吹町より善郷小学校児童クラブ整備プロポーザル審査委員会の委員長を委嘱された。
- 齋藤俊克准教授は、5月31日に(一社)日本建築学会東北支部より東北建築賞研究奨励賞選考委員会委員を委嘱された(任期は令和6年3月31日まで)。
- 市岡綾子専任講師は、白河市より景観学習事業の講師を依頼され、6月と9月に、市岡研究室を中心とした学生有志とともに児童の学習支援を行った。
- 市岡綾子専任講師は、6月25日に日本造園学会より作品選集刊行委員会委員を委嘱された。
- 市岡綾子専任講師と市岡研究室は、7月1日発行の富岡町栄町団地地区高齢者散歩マップ制作に関わるまちあるきWSに参加、吉澤伊代さん・横井誉大さん(市岡研・M1)・齋藤将歩さん・齋藤創さん(市岡研・4年次生)はマップのイラストを制作した。
- 市岡綾子専任講師は、7月1日に田村市より田村市都市計画審議会委員を再度委嘱された。
- 結城諒真さん(浦部研・M1)は、7月20日に令和3年度卒業設計で取り組んだ作品「今、集落の暮らしの結節点-ごみ集積場の可能性-」で第2回フェーズフリーアワード2022(アイディア部門)に入選した。
- 佐川了さん・増田健介さん・森花音さん・吉田桃子さん(市岡研・4年次生)は、7月25日に白河市内の暮らし体験住宅-まちなかベース-の提案について、白河市長にプレゼンテーションを行った。
- 市岡綾子専任講師は、7月26日に福島県都市計画協会主催まちづくり講習会において「『まち遺し』からみたまちづくり」と題し講演された。
- 廣田篤彦教授は、8月3日に郡山市より郡山市開発審査会委員を委嘱され会長に選出された。
- 高橋岳志助教は、8月5日に日本建築学会主催第51回工業高校建築教育研修会において「CLT建築物の地場産業的生産システムに関する研究および設計事例」という題名で講演された。
- 廣田篤彦教授は、8月10日に郡山市より建築審査会委員を委嘱され会長に選出された。
- 市岡綾子専任講師は、8月22日に福島県よりふくしまユニバーサルデザイン推進会議委員を再度委嘱され、副委員長に選出された。
- 市岡綾子専任講師は、8月28日に須賀川市より須賀川市文化財保護審議会委員を再度委嘱された。
- 高橋岳志助教は、8月30日に発行された「Replan 福島2021」に設計した自邸が掲載された。
- 関日奈乃さん(速水研・2022年3月卒業)は、9月5日に日本建築学会大会において卒業論文『雑居地・新潟島の明治期の都市形成に関する研究-外国人の住まいに注目して-』で優秀卒業論文賞を授与された。
- 横井誉大さん(市岡研・M1)・迫出町妃菜さん・佐野匠さん(市岡研・4年次生)は、9月5日に矢吹中学校から依頼され、矢吹創生学の授業の一環として矢吹町でのまちづくり活動について説明した。
- 浦部智義教授は、9月12日に行われた創立100周年記念「日本大学校門建築会ロゴデザインコンペティション」で審査員をつとめた。
- 浦部智義教授は、9月15日に大熊町交流施設linkの大熊多目的ホールで行われた令和4年度「復興知」イノベーション・コースト構想事業活動報告会に参加した。
- 浦部智義教授は、9月27日に行われた福島県土木部専門講習(建築II)「最近の話題(新技術、新工法等)」において、『新しい木構法の開発・展開とそれを取り巻く現況について-縦ログ・パネログ構法を中心に-』と題して講演した。
- 齋藤俊克准教授は、(公社)日本材料学会誌「材料」10月号の「会員便り」に「研究と学会活動」と題して寄稿された。
- 市岡綾子専任講師は、10月に郡山市より郡山市史編さん推進委員会社会・防災ワークショップ委員を委嘱された。
- 市岡綾子専任講師は、10月1日に福島県より福島県景観アドバイザーを再度委嘱された。
- 浦部智義教授と浦部研究室は、10月8日に計画・設計に携わった医療・福祉等建築群『Smart Wellness Town PEP MOTOMACHI』で2022年度グッドデザイン賞を受賞した。
- 齋藤俊克准教授は、10月20日に福島県フライアッシュコンクリート研究会委員を委嘱された(任期は令和8年3月31日まで)。
- 10月22日・23日に、日本大学工学部を会場に日本インテリア学会第34回大会(福島)がオンラインで開催され、大会長を速水清孝教授、実行委員長を市岡綾子専任講師が務めた。また、速水清孝教授は「資格をめぐる葛藤-日本の建築家と建築士-」と題した特別講演を行った。
- 吉田奈美さん(浦部研卒)は、10月23日に令和3年度卒業設計で取り組んだ作品「布降る街、商いを導く知との邂逅-ファッション的な空間構成-」で第29回インテリア学会卒業作品展において優秀賞を受賞した。
- 吉澤伊代さん(市岡研・M1)は、10月23日に日本インテリア学会第34回大会にて学生発表奨励賞を受賞された。
- 阿部佳穂さん(浦部研・学部4年)は、10月27日に行われた第26回JIA東北建築学生賞において作品名「記憶の方舟~6次産業による地域の活性化~」で奨励賞を受賞した。
- 糠谷勇輔さん(宮崎研・学部4年)は、10月27日に行われた第26回JIA東北建築学生賞において作品名「心の器」で優秀賞を受賞した。
- 齋藤俊克准教授は、10月28日に(公社)日本コンクリート工学会東北支部より東北地方におけるコンクリート構造物の劣化進行に関する調査研究委員会委員を委嘱された(任期は令和6年3月31日まで)。
- 市岡綾子専任講師は、10月31日に桑折町より桑折町都市計画マスタープラン策定委員会委員を委嘱された。